

「変わらないために、変わり続ける ～人道を貫くために～」

日本赤十字社を取り巻く環境は大きく変化している。しかしながら、本質的な課題は、外部環境変化そのものではない。問われているのは、変化に向き合いながら、将来にわたり変わることのない日本赤十字社の使命を果たし続けなければならないということ。

そのためには、日本赤十字社に関わる一人ひとりが自らの活動を不断に見直していく必要がある。いわば、『変わらないために、変わり続ける』。このことが、創立150周年という大きな節目に求められている。

日本赤十字社が将来にわたり変わらず大切に守り続けるべきもの

● 人道をはじめとする赤十字の基本7原則の普遍的価値

人道はあらゆる属性を超えた普遍的価値

人道をはじめとする赤十字の7原則が理解・尊重・支持されるよう堅持し続ける

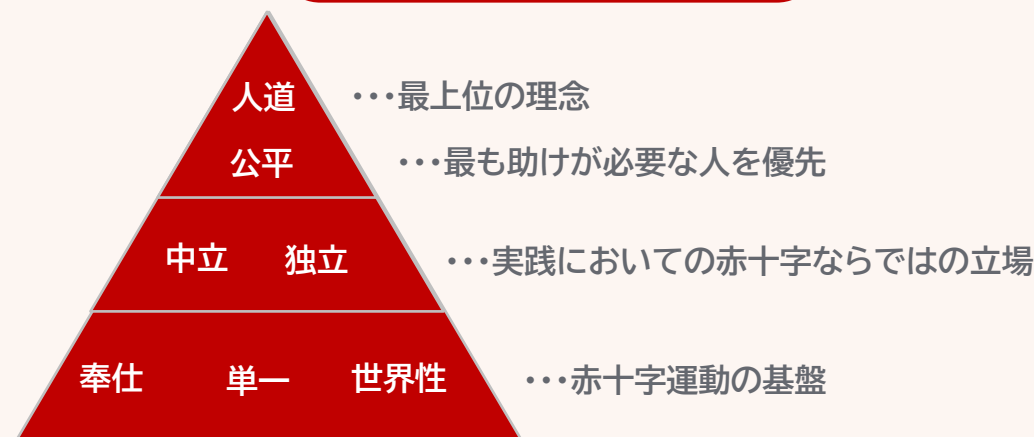
● 日本赤十字社が有する独自の公共性

ジュネーヴ諸条約と国内法に基づく独立性・中立性の下、行政と連携しつつ公共性の高い人道支援を実践する固有の価値を発揮し続ける

● 人道を実現する日本赤十字社の基本姿勢

多様な人々の参加によって成り立つ運動体として、いかなる状況下でも人々の力を結集し人道を実践し続ける

赤十字の基本原則(7原則)



日本赤十字社が注視すべき外部環境変化

①自然環境

生態系の変化・崩壊、気候変動、感染症、地震等のリスクの複合化・長期化による、平時からの予防と備えを含む保健医療や災害対策の一体的な取組の必要性の高まり



②人口構造

少子高齢化・長寿化・単身化、都市集中と過疎、外国人居住者の増加に伴う多文化等を踏まえた支援の必要性の高まりと人材・組織基盤の不足



③社会 (コミュニティ)

つながりの希薄化と多様化や、支援する側と支えられる側が重層的に重なり、相互扶助が循環する必要性の高まり



④経済

格差拡大等による生活の不安定化、医療・生活支援へのアクセス困難化と寄付やボランティア等の活動基盤に対する影響



⑤世界情勢

国際秩序の危機、紛争の増加・複雑化並びにこれらに伴う移民・難民の拡大による人道支援の必要性の高まり。国内の多様な人々の包摂、人道アクセス確保に関する課題の増加



⑥テクノロジー

ICT・AI・データの活用がもたらす新たな可能性。他方、偽情報、社会の分断、デジタル・ディバイド、個人情報保護や倫理面の課題の顕在化



上記を踏まえた重点課題

- (1) 人道理念を貫くため、受動的適応ではなく創造的な変化を自ら進め、「変わらないために、変わり続ける」こと
- (2) ニーズの増大・多様化とリソース縮小の同時進行を悲観視せず、「誰もが担い手となる社会への転換機会と捉える」こと
- (3) 赤十字運動に関与する主体の量・質ともに拡大し、「共創する」力を強化すること。テクノロジーとデータの活用に加え利他性及び相互性の視点を取り入れること

以上を踏まえて、日本赤十字社が今後の活動において重視すべき基本的考え方と活動の方向性を3つに整理

日本赤十字社がこれからも使命を果たし続けるために 重視すべき基本的考え方

(1) いかなる時も、人間の命・健康・尊厳を中心に人道を追求する

人道は普遍的価値であり人類の知恵。国際人道法と赤十字の基本原則を拠り所に、立場の異なる人々や声なき人々の苦しみにも目を向け、行動を促すことが重要。赤十字運動に携わる一人ひとりが「命・健康・尊厳を中心に据えた行動とは何か」を問い追求することで、人道が社会に根付き、社会の力に変わることを期待

(2) 多くの人々の思いを束ね、人道の力で社会をつなげる

人道は、市民、行政、企業、自治会、学術機関、国際機関等多様な人々の力を持ち寄り、支える側と支えられる側を固定せず、共に実践していくことが重要。平時から苦しみの兆しに気づき、緊急時の被害と苦痛の予防・軽減を図るために人々をつなぎ、人道を社会に循環させる役割を期待

(3) 理念の実践者たり得ているのかという自らへの問いかけを続ける

日本赤十字社自らが人道を実践する主体であり続けることが重要。人道という「変えてはならないもの」を受け継ぐためには、活動内容・方法、組織、資源の生かし方は外部環境変化等を踏まえて「変えるべきもの」として問い続け、豊富な現場の知見をもとに、時代にふさわしい形に発展させていくことが大切

基本的考え方に基づく日本赤十字社の これからの活動の方向性

(1) 人々と共にぶれることなく人道を追求する

- 現代の文脈と手法による人道の語り直し、人々の苦しみをデータで可視化することによる社会への問いかけ
- 人道の担い手自身の命・健康・尊厳を守ること
- 事業や世代を超えた誇りと知見の継承と深化



(2) 赤十字運動を公共財に、人々がつながり、支え合う社会をつくる

- 人道を軸にした多様な関係者との人道的な共通ゴールの設定と、コミュニティにおける持続的な支え合いの拡大
- 地域の課題と国・世界の人道課題の連結と、全国に広がる基盤と世界的ネットワークを活かした協働
- 技術活用による多様な参加と新たなつながりの拡大と、活動の学びの社会への還元



(3) 使命に照らし、自ら未来を切り拓く

- 日本赤十字社が自ら担う役割と、多様な関係者と共に担う役割の明確化
- 機を逸せず迅速に行動するための体制・共通認識・社会的支持基盤の整備
- 平時の人材・施設・知見・データの予防や備えへの活用と、危機対応の知見の日常への還元による、平時と緊急時の実践の循環
- 持続可能な事業を目指した、活動範囲と優先順位の明確化とリソース配分の見直し



懇話会委員からのメッセージ

本懇話会は、日本赤十字社の被災地や紛争地で支援活動にあたる方々、病院や血液センター、社会福祉施設等で人々の命・健康・尊厳を支える方々、また、地域や学校等のコミュニティで共助の輪を広げる赤十字ボランティアや支援者の方々、人道の実践を担う全ての皆様に、改めて敬意と感謝の意を表します。難しい局面もあったかと推察しますが、現場の皆様が勇気をもって判断し、行動し、人々の命・健康・尊厳を守るために尽力してきた日本赤十字社の現場の歩みは、誇るべき財産です。私たちは、日本赤十字社がこれからの時代においても人道を実践かつ推進する存在であり続けることを改めて期待します。

日本赤十字社には、多様な関係者と共に人道を社会に根付かせる「オーガナイザー」あるいは「コーディネーター」的な役割と、自ら人道を実践する「プレイヤー」的な役割の双方が期待されると提言しました。この二つは相反するものではありません。人道上の必要を起点として、時には自ら行動し、時には人々の力をつなぎ、その時々果たすべき役割を柔軟に選び取ることが、これからの日本赤十字社、さらには赤十字運動を形づくるものと考えます。

その選択を現実の行動へ移すのは、赤十字運動に関わる一人ひとりの主体性であると思います。その主体的な行動が、人道を起点に組織や世代、国境等を越えて結ばれていくことによって、人道という普遍的な価値は、社会の中に生きた実践として大きなうねりとなり受け継がれていくことでしょう。本提言書が、赤十字運動に関わる全ての人にとって、これまでの歩みへの誇りと自らの役割を改めて確かめ、次の一步を踏み出す契機となることを願います。日本赤十字社が、人道の灯をこれからも、これまで以上に高く掲げ続けることを、敬意をもって期待します。